

| | | |
|--------------------------|----------------------|-------------|
| 体育 1年B組 | うみのなかを たんけんだ！ | 石本倫章 |
|--------------------------|----------------------|-------------|

1 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

本単元は模倣運動である。模倣運動の楽しさは次の通りである。

- そのものになりきること
- 全身を使ってあらわすこと
- 他の人に共感してもらうこと
- お話をつくりながら踊ること

低学年の子どもたちにとって、なりきってあそべる模倣運動はとても魅力的な運動である。それは、普段の子どもたちのあそびをみてもよくわかる。中庭で木の実や花をつかったままごとあそびに興じる様子や、教室の後ろやワークスペース等でたたかいごっこに白熱する男の子が多いからである。これは、他者を意識したあそびではなく、自分の中で没頭するあそびである。それを、学習に組織しようと考えた。模倣運動は、個人の変身欲求を充足させることを目的としている。でも、それだけなら、普段のあそびとかわらなくなる。だから、本単元では、「他の人の共感」と「グループでの活動」を意図することで、学習につなげていこうと考えた。(本単元の主張点)

模倣運動では、ひとりおどりを大切にすることがある。本単元でも、ひとりおどりを大切にしていけるが、常にグループの中での活動にしていく。グループの人数は男子2人、女子2人の4人グループを考えている。4人のグループは、1年生の子どもたちにとって多すぎるようにも感じるが、その中の学習の様相をみとっていくことで、学びあえる学習集団にしていきたいのである。そのために、各グループの課題をはっきりもたせることを支援していきたい。

また、他の人に共感されるともっとこの運動が楽しくなる。だから、そのお互いを認めあえる学習集団の在り方を探っていくことにした。このことは、本校の研究主題である「たがいのまなざしが響きあう学習」と関連づけて考えている。(詳細は事項)

(2) 教科提案とのかかわり

今年の教科のテーマは、本校の研究主題を受けて、「運動の楽しさを真剣に学ぶには」とした。そして、サブテーマを「学びあえる学習集団を考える」とした。1年生の学びあえる学習集団を述べる前に、本校の研究主題を自分なりに整理することにした。次に述べることは、この単元を計画するうえでの前提と考えている。

子どもは学ぶことが好きである。そして、自分の力を高めたいと願っている。だから、より良い学習対象や仲間、適切な支援に接することで、その子の学びが真剣なものとなってくる。その子のまなびが真剣になってくると、もっと深く・ひろく学びたいと願う。それが、「意味と内容」がひろがる学びだと考えている。真剣な学習をさせるためには、学習対象の吟味が第一の支援であり、それをいかに教材にしていくか（単元構成）が重要になってくる。

今年度の研究主題は「互いのまなざしが響きあう学習」である。上述した、真剣な学びが展開されたとき、子どもたちは真剣味のあるかかわり方をしていくだろう。時には、厳しい意見となるかもしれないし、暖かみのある雰囲気となるかもしれない。しかし、それは、かかわり合いだけを問題にしているのではなく、真剣な学習をしていた結果としてかかわり合いの質を問題にしようとしていると考えている。かかわり合いの質が高まると、その子の学びの質も当然高まっていくだろう。それが、響きあいと考えている。

つまり、子どもたちに真剣味のある学習をさせることが、研究主題にせまることだと考えている。

本校では、子どものより良い学びを確立させようとしている。学びは本来個々人が中心になっていると言えるが、学びあいがなければより良いものになっていかない。学校での学習の意味である。お互いのより良い学びあいを響きあいとするならば、それをみとるためのキーワードは、「真剣な学習」だと考えている。「真剣な学習」というくくりは、各学年やクラスの実態で変わってくる。1年B組の子どもたちにとっての「真剣な学習」は、次のように考えている。

1年生の子どもたち（1年B組の実態）は、学習面では、好き嫌いがはっきりしていて、興味・関心のもてないことには消極的である。反面、興味・関心がもてると学習としての高まりもたいへん期待できる。また、考えることが好きな子もいて、話し合ったり、書いたりすることも好きな子が多い。友達関係は、まだまだ強くなく、先生との関係を強く求めてくる子が多い。男女の仲も良いし、明るく活発な子もいる。このことから言えば、少しマイペースな子がいるが、全体的に学習力が高く、学習の雰囲気も良い。また、ノリのいい子が多いので、その子たちにつられて楽しい雰囲気をつくりやすいと考えている。

以上のような実態を受けて、1年生の響きあいを考えみた。1年生は、まだまだ、日ごろのその子の様子をしっかりとみていないのは当然のことである。だから、他学年のように、その子の内面までふみこんだかかわり方は難しいだろう。しかし、自分たちの学習が楽しくなっていくために活躍できる子を認めることはできるし、楽しく活動している子もわかる。そして、その子たちに影響されたり、楽しさが強くなっていったりすることで、クラス全体の意欲や技能が高まっていくであろう。それが、今現在の響きあいのある学習であり、その様子がでてくるために、真剣な学習にしていかなければならないのである。

2 単元目標

- ◎ 海の中の様子を思い浮かべ、海の中の生き物や海底火山、海藻類など、海の中のいろいろなものに変身して、踊ってあそぶ。
 - ◇ 自分のイメージを動きにかえたり、他の子の踊りをまねたりしながら、自分たちのイメージに合う海の中を体で表そうとする。(興味・関心・意欲)
 - ◇ 自分のもったイメージを動きの言葉にかえたり、お話づくりをしたりすることができる。(思考・判断)
 - ◇ それらしくうごいたり、大きくおどったりできる。(技能)
 - リズムに合わせて、ダイナミックにおどることができる。(技能)

3 単元計画

【運動の特性】

① 運動の一般的特性

《模倣・表現あそび》

- ◇ 身近な生活や、興味のあることの中から変身したい題材を見つけ、そのものになりきって全身の動きで表現して楽しむことができる運動である。また、見る者にわかってもらえるといっそう楽しい。

《リズムあそび》

- ◇ 映像や音楽に合わせて、ダイナミックに踊ると楽しい運動である。友達と調子を合わせたり、掛け声をかけあったりするといっそう楽しくなる。

② 子どもからみた特性

- ◇ 生き物になりきることがたのしいと感じる子が多い。
- ◇ タコや海草など、ゆらゆらした動きや小魚のような素早い動きが好まれるだろう。
- ◇ チームのまとまりが良いグループは、それらしい踊りや大きい踊りを考えたり、お話をつくったりできる。
- ◇ できる、できないがないので、技能が低くいたための苦手意識をもたなくてよい。
- ◇ 心の開放ができる子は、ダイナミックな動きにつながり、より楽しくなる。
- ◇ 他の子の動きをまねたり、同じ踊りをしたりすることを好む子が多い。
- ◇ お話づくりをすると、グループでの学習につながり、お互いの良さを確認できる。
- ◇ 変身しやすくなる雰囲気や道具があれば、海を表そうとする意欲につながる。

4 単元の考察

単元の主張点とかかわって、まなざしが響きあう姿について考察していくことにした。

◇ おはなしをつなげることで、楽しい学習になり、真剣味も増えてくる

模倣運動は、他者になりきることが楽しい運動である。しかし、その物らしく踊ることを学習内容にしていると、変身欲求とのかい離がおこることがよくある。そこで、真剣味のある学習にするために、おはなしをつくること・おはなしをつなげていくことを学習内容の中心とした。そのために、ひとりおどりのときに、おはなしの作り方の学習をさせたのである。ここでは、即興表現をさせるのではなく、あくまでおはなしをつくり、それに合ったおどりをさせたのである。この時間は、教師主導ですすめた。だから、やることははっきりしていて、分かりやすい学習になったように感じた。また、おはなしを創っていく過程の楽しさやおはなしに合ったおどりをしていく楽しさがあり、高まりのある真剣味のある学習になっていった。

◇ 1年生でのグループ学習の可能性は

まなざしの響きあいをもとめるために、ひとりおどりの時間でもグループを意識した単元計画にした。単元を計画するとき、1年生では、おたがいのまなざしが響きあうような共有的な学びができにくいと考えていた。ところが、単元の主張点にも書いたようにお互いの良さを認めたり、助け合ったりできた。また、考えの食い違うところでは意見対立がみられ、それをまとめようとする周りの子の姿もあった。

体育科では、その子の性格がストレートに出やすい。今回の単元では、うまくまとめるというより、おはなしづくりでたくさんのアイデアを出し、自ら楽しく踊れる子のいるグループの学習に高まりや真剣味がみられた。例えば、着目児◆のいるグループである。ここは、◆児が楽しくおどるので、おどることが得意ではないグループの子も楽しくなっていた。そして、その子たちも自分のアイデアを出し合い、真剣味のある学習になっていったのである。◆児は周りより良い影響を与えようと意識したのではない。自分の楽しさ追求が他の子により良い影響を与えたのである。これは、1年生の今の時点での響きあいだと考えている。

5 成果と課題

今回、1年生でもグループでの共有的な学びが可能であることがわかった。そこには、教師の計画性と指導性が不可欠であることもわかった。また、模倣運動のように、あまり個人差の出にくい運動では、他の子の良さを共有できることがわかった。

そこで、もっとその子の性格が出やすいボール運動や陸上運動での響き合いを実践しなくてはいけないように感じた。ボール運動では、楽しさの要素が個々人によって大きな違いが出てくる。また、陸上運動でも、意欲や能力面での個人差が大きくなっていく。その子たちをグループ化し、響き合いのある学習がどのように構築できるのかが問題となってきた。